
少年

れんにゆー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年

【Nコード】

N4419A

【作者名】

れんにゅー

【あらすじ】

身寄りの無い少年は生きる為に罪を重ねる。ある日、少年は奴隷として売られていく少女に恋をする。その少女が売られた家に走った少年は既に壊された少女と壊した人間を見る。そしてその少年も二人を壊して、再び生きる為に罪を重ねる。

風が砂を運ぶ。
太陽が地を焼く。
人は苦悶する。
悪は悪でなく正義。
人の苦悶を餌に誰かが肥大化する。
貧富の、差。
豊かな者が貧しい者を喰らい、さらに肥える。
貧しい者は豊かな者に喰われ、さらに衰える。
最悪の時代。
最悪の世界。
その世界に、天国はなく。
その世界に、地獄はなく。
その世界に、この世界よりマシなモノはない。

/0

肌を削る太陽と風。
その中をボロ布を纏った少年が駆ける。
その姿は風。
胸にしっかりと抱きしめた一斤のパン。
それが彼の命であった。
少年は天涯孤独。
戦争に両親を奪われ、一人。
「金と身分の無い人間は人間にあらず」
それがこの世界共通絶対の価値観。
「人は皆平等」

それはこの世界共通絶対の偽りの言葉。

故に、少年は思う。

今より彼が幼かった頃母親に聞かされた御伽噺。

善行により導かれる天国。

悪行により導かれる地獄。

どちらにしたところで、この世界以外に連れて行ってくれるのなら、喜んで差し出された手を取ろう。

その為になら、他人だって殺せる。

少年は周囲を見回して追っ手がいないのを確認する。

その姿は年相応のものではない。

硬いパンを食いちぎる。

鉄の味がした。

/ 1

今日も、彼は自分の命を賭けてパンを盗みに道を駆ける。

誰も彼を捕まえることなど出来ない。

ましてや、他人の命を喰らい醜く肥った者になど。

そして今日も、彼は見事に命を繋いだ。

いつもより厳しい追跡だった。

無我夢中で走った彼は、知らない場所に居た。

それは裕福なモノが巣くう場所。

この都市の中核。

全てのニンゲンが彼を汚らわしい者を見た、と去っていく。

全身泥水に汚れ、彼等が捨てるようなパンを大事そうに抱えている少年。

裕福なモノには特別汚らわしく写った。
同じように、少年も彼らを同じ目で見える。

場所を都市の端から中心に変え、少年は今日の命を明日へ足して行く。

いままで居たところよりここはやりやすそうだった。
居るニンゲン全てが愚鈍に見えた。

/ 2

楽だった。

今までの数倍上等なパンを食う彼は思う。

鉄の味も、泥水の味もしない。

腐肉を喰らい、生き血を啜った頃に比べればここはまるで……

その考えを振り払う。

真昼の月がその姿を、嗤った。

/ 3

彼は殺人の経験が無い。

だが、何をどうすればヒトが殺せるのかは熟知している。

始まりは朝。

パンを盗みに風になったときである。

馬に引かれる牢獄を見たのだ。

その中に詰め込まれた人間。

その一人に彼は吞まれた。

初めて、他人の為に何か行動を起こそうとしていた。
彼は……恋をした。

普段、彼を見るものは己が目を疑うだろうか。
風のような面影は一切ない。

涙でぐしゃぐしゃな顔。

遅々とした歩の運び。

両腕で惨めに引きずる、剣。

その剣は既に刃物としての役割を終えていた。

ただの鈍器。

それが彼に盗める精一杯の存在だった。

誰が見てもその切れ味は無い。

それでも、人々は彼を止められない。

誰が彼を止められるだろう。

仮に、誰かが彼を止めたところで彼が従うだろうか。

声を掛ければ、間違いなく彼はその鈍器を振りかぶる。

腕を掴めば、躊躇い無く彼はその鈍器を振り下ろす。

彼はヒトの業で積み上げられた坂を登る。

声を掛けてきた何かに鈍器を振り上げた。

腕を掴んできた何かに鈍器を振り下ろした。

頭。腐ったトマトをうつかり落としてしまった光景を思い出した。

首。踏みおられた花と同じだった。

腕。昔食べた蛇の味が舌の上に広がった。

胸。最近見た噴水というものを彷彿させられた。
足。生まれたばかりの四足の動物が頭をよぎった。

目に映るものを全てを否定して、破壊して、殺害していくこの世界
の風、その体現。

荒れ狂う悪意。 害悪。

最悪の、根源。

蹴破ったドアの向こうに、少女は居た。

そばには醜く肥ったニンゲンが。

風の彼に、ここで何が行われていたのかは理解できない。

その知識、その穢れ、その濁りは無い。

しかし、その肉塊は違う。

なぜこの肉塊は何も纏っていないのか。

、少年に理解は出来ない。

この鼻につく嫌悪感を呼び起こすものの正体。

、彼に理解は出来ない。

肉塊が何を喚いているのか。

、風たる彼に、ニンゲンの吐く語など理解できるはずが無い。

腕がどうなるうとよかった。

潰す。

この肉塊をただひたすら潰す。

そうすれば、きっと……きっと。

少女に流れる赤と白。

純白を汚された肌を絡める鎖。

濁った瞳。

無表情に泣き、

無表情に笑う。

無表情に。

恋することを知ってしまった少年。

少女の為に走った彼。

そうして風は、一度纏うボロ布で穢れた刀身を拭う。

錆びの浮いていた刀身に写る、風。

壊れた器に錆び付いた剣を振り下ろす、恋する少年。

潰れた、腐った、真赤なトマト。

/ 4

屋敷の食料を貪る。

どれを口に入れても、塩気が強かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4419a/>

少年

2010年12月18日22時40分発行